

武家屋敷の修理と復原

足立正智

1. 武家屋敷

塩見小兵衛が住んだことによって、塩見縄手と呼ばれる道に面する武家屋敷

幕末頃の城郭図 「塩見縄手」と記載

明治 12 年の地図 「シロミナワテ」と記載

昭和 15 年,36 年の地図 「城見縄手」と記載

明治維新後から昭和 20 年ごろまでは「城見縄手」、江戸後期は「塩見縄手」

享保 18 年（1733）の百姓町大火によってこの武家屋敷も焼失したと考えられており、その後の再建建築が現在のものと考えられていた。

改修と同時に行う調査のポイント

- 1) この建物が 300 年近く経過した建物であるかどうか
- 2) 間取りは再建当初のものだろうか
- 3) 武士が住んでいた時代の間取りを復原できるのか

2. 実施した調査

1) 建設年代を表す墨書など

建設当初の物を思われる墨書はあったが、年代を示すものはなかった。
棟札や祈祷札の類はなかった。

2) 記録文書の洗い直し

瀧川氏から松江市が購入した記録などはあった。
明治期と思われるこの家の家相図や近隣の武家屋敷の間取り図があった。

3) 部材の痕跡と風化度の調査

柱や梁桁などに残る痕跡から改造の変遷を探る。
材料の風化度から建設時からの経過年数を探る。
金物、裏紙、造作、材料などから建設年を予想する。

4) トレンチ調査と埋蔵物の調査

工事で出た埋蔵物の調査（埋蔵文化財室）
幅約 60 cm、長さ約 2.5m、深さおよそ 2m 強の掘削調査

3. 調査により分かったこと

- 1) 建築は 1833 年からだと 300 年弱の経過年数になるが、それほどの時間経過による風化具合の材とは認められない。せいぜい 200 年強程度の風化具合と思われる。
- 2) いくつかの柱に背割りが確認できたことにより、江戸時代末期のものと考えられる。

3) 建設当初から少なくとも 5 回の間取りを変える改修、減築、増築がなされており、当初の姿を再現することは難しい。

4) 敷地地盤は嵩上げが繰り返されており、城下町が形成されたころは、現在よりも約 2m 下に地盤があった可能性もある。

5) 2 回以上の火災に遭った可能性がある。

4. 住人の歴史

「松江藩列士録」と「武家屋敷明細帳」から

・塩見増右衛門 小兵衛 など	大阪・江戸詰から家老並になる	400 石→1400 石
・柳田屯	宝暦 5 年（1755）から	500 石
・大野舎人	宝暦 13 年（1763）から	1000 石→1100 石
・今村平馬	明和 4 年（1767）から	800 石
・氏家一学 右膳 頼母他	安永 6 年（1777）から明治維新まで	800 石→80 石

居住者はほぼ 1000 石弱の上級武士クラス。

塩見家は寛永 11 年（1634）で 400 石取りから安政 2 年（1855）には栄五郎 1400 石取りの
中老となる

明治初年ごろ瀧川奎之丞が家屋敷を購入

瀧川亀太郎(君山)は司馬遷が著した史記の研究で知られる漢学者である。慶応元年(1865)
11 月に松江市中原町にて松江藩士瀧川奎之丞の長男として生まれる。亀太郎は中学校で若
槻礼次郎と同級で主席を争った仲であるといわれる。その後明治 15 年に亀太郎は上京し、
島田重礼に学び帝国大学古典科に入学する。23 歳で卒業の後は仙台第二高等学校の教授に
就き史記研究を始める。昭和 5 年 3 月に松江に帰る。父奎之丞は明治になって教員となっ
て家計を支え、武家屋敷を手に入れてここに居を移している。亀太郎が帰ったのはこの北
堀の旧武家屋敷であった。亀太郎は昭和 9 年に再び上京するも昭和 20 年に帰郷して疎開す
る。昭和 21 年 2 月 23 日没。

5. 間取りの改変

建設当初から痕跡等をたどり段階的な復元図を作成した。

周辺の武家屋敷の間取り等も参考にした。

その結果、下記のように変遷過程を追うことができた。

- ・建設当初 現在の屋敷よりも東側に伸びた形であったと思われる。
- ・明治 10 年ごろ 瀧川奎之丞が大幅に改修。か「家族の間」、玄関部分間取り変更、東側の
台所・勝手等を減築。
- ・明治 32～38 年 北東隅部改修
- ・明治 38 年以降 中庭部分に増築、北東隅部の茶室改修。

4 年表

- ・昭和 6 年頃 北西隅部に便所増築、お風呂、台所改修
- ・昭和 44 年 北西隅の便所撤去、お風呂、台所改修 武家屋敷として公開
- ・昭和 57 年 補修工事

6. 間取りの復原

建設当初の姿に戻すことは、痕跡等が多すぎることで、発掘調査が全面的にできなかったことでも不可能であった。

そこで痕跡等も比較的是っきりしていて、発見された家相図も時間的に合致すると思われる。

長屋門は同じように間取りの変更が見られたが、修理前の姿、間取りに復元した。但し西側隅の「駕籠部屋」と言われていた部屋は「厩」であったものであろうと結論付けた。

7. 発見

- 1) 発掘 2 m下の地層から生活雑記が出土した。
- 2) 建具 幅の広い御殿建具が数枚使われていた。
- 3) 裏紙・新聞 裏紙は襖の裏等から主に瀧川家で使われたとみられる反故紙に書かれたものが見つかった。新聞紙は明治 30 年代の物から昭和初期のものまで確認できた。

8. 結論

この武家屋敷は修理以前に言われていたような、江戸中期の姿をそのままに残すものではない。

江戸時代初期のこの家屋敷は 2m下の地盤から始まった可能性がある。亀田山を削った部分ではないかもしれない。

改変がかなり多く、元は武家屋敷として建てられたものだが、現在の主屋と庭の姿は明治時代にあった姿に近い。

武家屋敷 年表			
		黒字:時代背景 青字:修理	
年度	時代背景 (修理内容)	変遷	
慶長12年 (1607)	堀尾氏松江城築城	(小黒氏入居)	
寛永15年 (1638)	松平直政公松江入り (松平直政1601~1666)	(今村氏入居)	
宝永 7年 (1710)	塩見小兵衛(4代目)入居 (塩見小兵衛1645~1719)	(塩見家)	
享保18年 (1733)	百姓町大火により類焼	↓	
		(氏家家)	
万延元年 (1860)	桜田門外の変	↓	
慶応元年 (1865)	瀧川亀太郎誕生(瀧川奎之丞長男)	↓	
明治元年 (1868)		(瀧川家)	
	↓	襖の裏紙に新聞紙使用 (家族の間)	
明治10年 (1877)			
明治20年 (1887)	東京帝国大学卒業		
明治27年 (1894)	~28 日清戦争	↓	
明治30年 (1897)	第二高校教授(仙台)		
明治32年 (1899)		新聞紙貼付け(武者隠し)	
明治34年 (1901)		書物貼付け(長4帖床ノ間)	
明治37年 (1904)	~38 日露戦争	↓	
		新聞紙貼付け(納戸押入)	
大正元年 (1912)			
大正15年 (1926)	大東文化学院教授	↓	
昭和元年 (1926)			
昭和 5年 (1930)	松江に帰る		
昭和 6年 (1931)	文学博士9学位授与 (全量)	襖の裏紙に新聞紙使用 (全量)	
昭和 9年 (1934)	再び上京	↓	
昭和20年 (1945)	漢学者 瀧川亀太郎(資言・スケフ) 松江に疎開		
昭和21年 (1946)	瀧川亀太郎 逝去		
昭和28年 (1953)	松江市の文化財に指定		
昭和44年 (1969)	松江市買収		
	復元改修工事(壁・間仕切り撤去・新設)		
	(壁修繕に伴う床・天井改修)		
	(建具・畳修繕・取り替え)		
	(外壁板壁張替え・漆喰塗り替え)		
	(浴室・台所土間廻り改修)		
	(北側便所撤去)		
	(築地堀・板堀新設)		
昭和46年 10月1日	(長屋門)観覧券発売所改造工事		
10月20日	(長屋門)竹垣・水路工事工事		
10月25日	館内板移設・主屋建具修理		
11月10日	裏口階段・入館路新設工事		
11月20日	排水路新設工事		
11月24日	裏門工事		
	古瓦購入(松崎水亭)	松江市	
昭和47年 1月13日	造園工事(生垣・四ツ目垣・樹木植栽(こうやま木6本) 安部義三	¥220,000	